

⑤ トリル・モイ著 大橋洋一 他訳  
『ボーヴォワール』

(平凡社)

シモンヌ・ド・ボーヴォワールといえば、『第二の性』の著者であり、20世紀最大のフランスの女性哲学者です。また、彼女は終生の事実上の伴侶であり、ライバルでもあったサルトルと共に実存主義を築き上げた知的女性の代名詞のように思われていますが、ボーヴォワール没後18年目、『第二の性』出版50年目の今また、なぜボーヴォワールなのか。

本書は、今まで研究されたスーパーウーマンとしてのボーヴォワールではなく、他の女性となんら変わるところのない複雑で悩み多き、しかし強さと勇気を持った女性として、彼女の本当の姿を余すことなく伝えてくれています。

950.28-Moi (H.T.)

⑦ オマル・ハイヤーム 原著  
陳舜臣 著  
『ルバイヤート』

(集英社)

核査察問題や保守派の巻き返し、厳しい戒律などで注目され、そのたびにちょっと怖い国と思われてしまうイラン。そんなイランに、のびやかに酒を愛で「飲もう、明日知れぬ身だから」とこの世のはかなさを歌い上げた詩人がいました。11世紀に存在したハイヤームの四行詩の邦訳は本書のほか、E.フィッツジェラルドの自由奔放な英訳からの重訳(国書刊行会)や、ペルシア語原点からの名訳(岩波文庫)があります。それぞれの翻訳で名作を味わってください。

929.91-Oma (N.T.)



⑥ アンドレーア・ケルバーケル 著  
望月紀子 訳  
『小さな本の数奇な運命』

(晶文社)

主人公の〈ぼく〉は、古書店の主人から売られなければ廃棄処分と宣告され、本棚の片隅で買手が現れるのを待っている一冊の本。なんとその本が自らの人生を語りだした!!

さまざまな人手をわたり歩いた彼の、60年間の「数奇な運命」の独白は、愛らしく、本であるにもかかわらず共感さえ覚えてしまう、そんな一冊です。また、本書の訳者も分からないという主人公の作者・作品名を、推理してみるのも面白いのではないのでしょうか。

973-Ker (H.T.)

⑧ 河合隼雄、南伸坊 著  
『心理療法個人授業』

(新潮社)

河合氏と言えば文化庁長官であり、心理学の第一人者であることは、あまりにも有名です。その河合氏が南氏を「生徒」にして、心理療法の「講義」をするという趣向です。目次も予習に始まり、第1講～第13講とする念の入れよう。本書は2002年に新潮社より出版されたものの文庫化で、「文庫版 おまけの講義」も付いています。ユーモラスなイラストと相まって、ぐいぐいと引き込まれてしまいます。それにしても、えらく贅沢な個人授業ではあります。

146.8-Kaw (T.F.)